

理学療法界およびその関係者にとって長年の念願であった4年制大学における理学療法教育が1992年に広島大学で始まり、今年の4月に学生を受け入れる群馬大学を含め合計10校となった。これは3年制短大が設置されてきたピッチよりも早い。その背景には、既存の3年制短期大学(部)が布石になっていること、ほぼ30年に及ぶ理学療法教育の歴史があったこと、そして文部省が医療関連職種の大学教育に力を入れ始めたことがあろう。4年制大学における理学療法教育は始まって間もないが、この時期に特集として取り上げ、今後の理学療法教育の改革、あるいは後続するであろう大学の参考になればと願って企画した。

■ 4年制大学における理学療法教育の課題と展望(河村光俊, 他論文)

理学療法士養成課程が4年制課程になって間もないが、大学そのものが見直され、大学院大学へとより高度な教育へ変貌しつつある大きな変換の時期に学生と教官は置かれている。大学の本来のあり方が理学療法士教育にも問われている。そのため、従来の専門技術偏重教育から脱脚し、幅広い人材を輩出する使命が大学に求められている。ここでは、大学教育の現状と問題点を私見を交えて論じた。

■ 4年制大学における理学療法教育カリキュラムの特性(乾 公美論文)

平成8年度現在、9大学で理学療法士の養成が行われている。大学といえども、厚生省の指定規則を順守した上で、カリキュラムを編成しなければならない。筆者は、各大学の専門科目のカリキュラムの特性を比較・検討し、その特徴を述べた。各大学の特徴は、多くの大学で必修科目より選択科目のなかにみることができた。

■ 4年制大学における基礎理学療法教育の課題と展望(灰田信英論文)

専門職としての基礎教育は4年制大学や修士課程での教育を最低基準と考えるのが今日の常識であろう。我が国の理学療法が真の「専門職」たるためには、これら教育機関の充実において、その目標を果たす必要がある。いまだ高等教育機関が少なく、学問的成熟度も未熟であり、かつ、指定規則にも抵触する課題などを抱えることから、この目標を達成することは、大学課程といえども容易なことではない。

■ 4年制大学における理学療法学内実習の課題と展望(久保 晃, 他論文)

国際医療福祉大学理学療法学科は入学定員80名と多いのが1つの特徴である。当大学の教育方針である基礎基本(原理原則)の重視、自学の精神育成、専門性重視について述べた。そして、学内で実践している実習の現状とその効果判定として行った実技、口頭試問に対する学生の反応を紹介し、学内実習における課題と今後の展望についてふれた。

■ 4年制大学における理学療法臨床実習の課題と展望(篠原英記論文)

大学の役割は、「学ぼうとする者の知的・道徳的および応用能力を高める」ことであり、臨床実習もこの目標にそってなされるべきである。よりよい臨床実習教育を推進するためには、①養成校側の臨床実習教育目標の臨床実習指導者への説明と同意、②学習目標と教育目標の一致、③臨床実習指導者の資格認定制度の推進と報酬(メリット)、などに関して努力と配慮が必要である。